

卒業論文レジメ

—『中論』の思想—

和田 寿 弘

中論の帰敬偈において、「滅することなく生ずることなく、……去ることのない、戲論の滅した吉祥なる縁起を……」という表現がある。否定詞を含む8つの句は縁起を修飾する形容詞群であるが、その中の「同一のものなく、多数のものなく」については問題が残る。縁起の意味を真理や依存関係に限定した場合には、この二つの所有合成語の意味と縁起とが結びつかなくなる。「同一のもの」と「多数のもの」が縁起の内に含まれることが想定されていなければならないのだが、従来考えられてきた縁起の意味ではそれは不可能である。さらに、中論の中で、滅するのか、生ずるのか、同一のものか、異なるものか、について論じられるのは諸法である。この点からも、帰敬偈における縁起は諸法そのものをも意味するのではあるまいか。

中論では、諸法が滅するのか生ずるのか、常住なのか無常なのか、同一なのか異なるのか、来るのか去るのかが論じられているが、批判の方法としてはすべて第二章に集約されると言っても過言ではない。龍樹の方法の大きな特徴は帰謬論法であるが、それを成立させる為には「諸法は実在する」という大前提を我々は補わねばならない。そうしなければ、例えば「行く人」「行くこと」「行かれるべき場所」の3つが互いに関係づけられないからといって3つが実在しないという結論は出てこない。

中論の議論の主な目的は、我々の持つ認識構造に従って把握された存在が真実の存在とは異なることを帰謬論法によって示すことではあるまいか。つまり、「人が行く」という現象を3つの要素に分割して把握する所に根本的

な誤りがあることになる。この把握の仕方を滅した所に、真實在即ち勝義が現われてくる。従って勝義は如何なる言葉によっても語られえない。ここで、勝義と勝義諦という語について触れておくと、中論の内容からは両者に区別はないと考えた方がよさそうである。

では仏の言葉は勝義なのであろうか、世俗なのであろうか。仏の言葉は直接仏より聞かれた場合のみ勝義として人々に受け取られるのではあるまいか。仏の人格と結合している場合のみそれは勝義でありうる。さもなければ世俗諦でしかない。

龍樹の最大の武器は帰謬論法であり、それによって無自性・空の正しいことを証明しようとしたのである。彼の帰謬論法を通して到達される勝義と世俗とは完全に重なっている。しかし両者は無媒介に同一なのではない。このことはとりも直さず、世俗の重要性・即ち空性と空性における目的と空性の意味の重要性を示している。我々の思惟に汚されないダイナミックな真実相を知る為にも世俗は肯定されねばならぬが、さらに勝義に達した者にとっては、世俗と勝義の区別がないという点で、彼には世俗も肯定されていることになる。それ故に、中論は仏の世界を扱っていると言えるのではあるまいか。仏の立場から演繹的に述べられた事その内容であり、しかも仏が使用した四句分別を多用している。つまり龍樹は中論の中で自己が仏の正統なる継承者であることを主張して已まないのではないだろうか。